

《研究ノート》

殷の稲作について

— 甲骨文字の再検討から浮かぶ水稻の重要性 —

池橋 宏*

Rice Cultivation in Shang Dynasty Implied by Its Prophecy
Inscribed on Turtle Shells

Hiroshi IKEHASHI

要旨

一般には中国の古代王朝の始まりの時代に黄河流域ではキビ・アワを中心とする天水農耕があったとされている。しかし、20世紀の末に洛陽に近い偃師で商（殷）の城が発掘され、祭祀場の跡から豚や牛の骨とともに、大量の炭化米も出土した。こうした発見に促されて、殷の甲骨文字を再検討した。甲骨文字には、よく似たキビとイネの穂を象形した文字があり、それに水（「氵」）をつけたものとなないものがある。前者はイネで、後者はキビとみられた。文字としてはキビよりイネが多かったが、後にアワの象形である「禾」の下に水をつけた「黍」の字が普及し、イネを表わす文字は途絶えた。イネを示す字がないから殷の農業は天水農耕であったと見る説はあるが、水田稲作は中国古代王朝の基礎の一つとして重要であった。

キーワード

中国古代王朝、殷（商）、水田稲作、甲骨文字、天水農業

1. はじめに

伝説によると殷は湯から辛（紂）まで17世、31王、600年続いた。その間によく遷都した。「前八後五」という。前八は湯の建国前の移動、あとは建国後の5回である（蘇濶 2007a）。遷都の地名は、今となつては分からないところもある。しかし、明白なことは、西の山西省境への遷都が1回くらいで、後は、江蘇省北部から山東省西部方面であり、そこは「廢黄河」に沿うような、低湿地帯から現在の大運河に利用されている湖水地帯の東西である。殷の最後の王の長期の遠征先は、そのようないわゆる「東夷」の勢力圏であった。

*hiro-i@fecl.ocn.ne.jp

これらの遷都の意味を考慮する際、遷都の回数に着目して、殷王朝の性格が遊牧民的であったとする見方があり、また軍事的遠征と後期の戦車軍団に着目して、戦士国家であったとする見方がある。しかしその地理学的位置や経済的基礎も考慮する必要があるだろう。

気候についてみると（游修齡 1993a: 298）、いまから 3000～5000 年前（紀元前 3000～前 1000 年）、黄河流域の平均温度は今と比較して、約 2℃高く、冬は 3～5℃高く、現在の長江流域に相当した。山東歴城の龍山遺跡では、炭化したタケネズミが出土、山東省の棲霞遺跡ではイネの印痕が出土し、河南安陽の殷墟や陝西省半坡遺跡で一緒にタケネズミと獐（ノロ）が認められた。これらは、黄河流域の当時の気候が温暖であったことを示している。やや寒冷化の進んだ紀元前 1000 年頃からあと、温度の変化周期は、約 400～800 年で、年平均温度の変動幅は約 1～2℃であった。

殷の偃師商城の遺跡から大量の炭化米が出土したことに加えて、殷の後期の都であった安陽と、前期の都であった鄭州の間の輝県に、龍山文化から殷の時代に、イネの痕跡をもつ城邑があったことは注目される。蘇浚（2007b: 179）によると、太行山脈の東の輝県の孟庄の遺跡は、西北から東南に傾斜した台地にあり、衛河の支流があって、伏流水が豊富である。30 万 m²におよぶ孟庄遺跡は沖積平原にあった。1951 年発見されたが、その後 1963 年ごろには、農地開拓で破壊された。1992 年 7 月に考古学者の曹桂岑が来て、護城河（濠）のある古城であると認め、発掘を開始したところ、二里头文化（夏王朝時代）の墓、それから商代の水井戸、商代の精巧な陶器、などが続々と出てきた。とくに、商代の前の渦紋陶器片などの遺物と一緒に、遊泥土中に稲穀の痕跡もみられた。

このような地理学的景観を考えると、殷の農業経済の上で水田稲作の寄与は低くないと思われる。殷の時代は、紀元前 1000 年以來の乾燥・冷涼化の進行の前である。紀元前 2500～2000 年ごろの龍山文化の時代から、商丘から徐州方面に至る廢黄河の地帯は、沼沢地から黄河・淮河下流域の広大な平原へと変わっていった。そこへの入植が続いてきたはずである。関連文献は示さないが、山東龍山文化の前の大汶口文化時代の後期に稲作の証拠がある。山東省の西部の湖水地帯や江蘇省北部には、龍山文化の後半に、いわゆる東夷諸国があり、それを支えたのはかなりの程度に水田稲作であったと思われる。このような歴史地理学的な背景を考慮して、殷の稲作の指標として甲骨文字を調べてみた。

なお、私は、白川静の甲骨文字の本を精読する一方で、偃師商城の遺跡や安陽の殷墟も見学し、殷の遷都先と伝えられる廢黄河の地方などを旅行した。「商丘」を中心とする低湿平原は、予期に反し丘陵地さえ見えないところであった。さらに、イネやキビの実際の形態を観察して、この研究ノートをまとめた。このような結論は伝統的な農書研究や文字学の範囲からは、必ずしも導かれないものとする。

2. 殷の甲骨文字からみたイネ

殷の時代からは文字が使われたので、文字から農業についても理解できるはずである。しかし、イネを指す字は混乱していて、誤解を招いている。「禾」という字は、穀物の総称のように使われているが、もとはアワの象形である。古代中国では、タイ語のイネを指す「khao」に近い音でイネを指したとみられる。それは「禾」の音であり、現在は「谷」とも表現される。游修齡（1993b: 202-207）によると、「稻」は禾に手と臼を加え、穀物を脱穀する状態を示す字形で、黄河上中流域の限られた地域で使われていた。

殷代にイネはなかったわけではない。すでに述べたように、殷代前期の偃師商城遺跡の祭祀坑に充満した炭化米が出土した。稲が宮廷祭祀の対象になっていたのである。偃師商城は、洛陽に近く、洛河（後で黄河に合流）に合流する直前の伊河に接する低湿地にあった。

中国農業史の大家である天野元之助（1981: 128）は、安陽一帯が歴史的には水田の多いところであったことを述べ、殷墟から大量の水牛の骨が出土することを挙げて、殷での稲作の可能性を認めつつ、甲骨文字に「稻」と確かに解読される文字が見出されていないという理由からイネを殷代の作物に加えなかった。彼は次に出る図1のBの文字をキビとする説を紹介したが、それがイネの穂の象形である可能性は考えなかった。貝塚茂樹（1977: 257）は、殷墟で獣骨のうち水牛が最も多いとして、灌漑稲作の可能性を考えていた。水牛の生活には水溜りが欠かせない。また彼は、「黍」の字形が、禾と水からなっていることに注目して、「現代の黍（キビ）が耐旱作物であるとすれば、灌漑用水にたよることを表すように見える甲骨文字の黍とは、果たして同一品種であろうか」と問題を出している。しかし、殷に稲作の証拠がないとして、「キビ・アワの天水農耕が黄河文明を導いた」という理解が定着した。

3. 甲骨文字の黍に三型があるのはなぜか

私は、貝塚（1977: 257 以下）の指摘を受けてさらに考察を進めてみた。図1の上部に、甲骨文字の大家である白川静（1972）の解説から、キビとアワの字を抽出して、A～Fに示した。抽出したA～Fの文字の元の甲骨は、図1の下半分に左、中央および右の3群に示した。そこには豊凶の占いが刻まれている。それらの出典は図1に注記した。なお、これらの文字の読み方については、貝塚の著書にあ

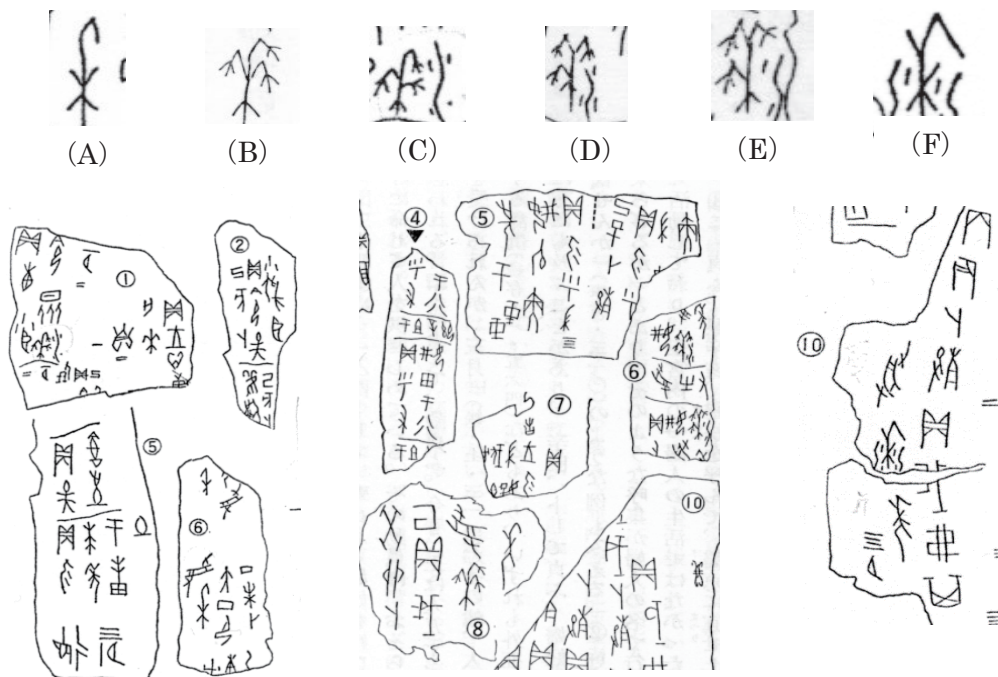


図1 甲骨文字のキビとアワ（AからFの文字は下の甲骨文字より抽出）

（引用した甲骨文字のものとの図の出典）

左図：白川（1972: 196）図33 ①羅振玉『殷墟書契前編』1913年、4巻、30葉、第2片。

⑥商承祚『殷墟佚存』1933年、653。

中央図：白川（1972: 150）図24 ⑥羅振玉『殷墟書契前編』1913年、4巻、39葉、第6片。

⑧劉鶚『鉄雲蔵龜』1903年、248-1。

右図：白川（1972: 24）図2 ⑩董作賓『小屯・殷墟文字』丙編（乙?）、1948、8。

る程度示されているので、個々の卜辞の訓読は示さない。

図1のA(図1左群⑥より)の字形は、先端から垂れた一つの穂のあるアワを象形して、禾の字である。図2にアワを示した。甲骨文字にはアワの字を示すAの形は多い。他方、甲骨文字のキビに3型がある。すなわち、図1のB(図1中央群⑧より)の形と、C(図1左群①より)、D(図1中央群⑥上より)およびE(図1中央群⑥下より)の一群、およびF(図1右群⑩より)である。Bのキビとされている字は、明らかに穂に枝梗が散生していることを示すキビの象形である。図2にキビを示した。C、D、およびEの字形には、Bのキビに、「彡」(水)の印が付加されている。Fの字は禾の下に「水」が付き、現在の「黍」の字のはじまりを示唆する。Fの字は、枝梗が散生するキビの穂の象形からも、水の付く作物のC、DおよびEの象形からも遠い。

もともとは、甲骨文字では、「穀物の禾」の中で、穂に分岐した枝梗のあるイネとキビを、単軸穂のアワ(禾)とは区別して象形Bとしたのであろう。図2に示したように、キビはイネによく似ており、アワとは区別される。その中で、湛水栽培のイネに、水をあらわす「彡」をつけて、キビと区別したと推察できる。以上の考察から、「彡」の印のあるキビの象形はイネを示したものと考えられる。

2012年に北京で農業史を専門とする二人の教授に会うことができたので、上述のことを確かめたが、今一緒にそれに関する論文を準備中であるとの答えであった。帰国してから、自宅で本を探しているとき、2005年に游修齡教授を訪問したときに頂いた論文集がでてきた。その内容の初めは、広く知られている「インド型と日本型の分化論」であったので、詳しく見ていなかった。ところが改めてみると、同書にはいくつもの注目すべき労作があった。驚いたことに、この論文集の中の小文、「稻与黍献疑」(游修齡 1993b: 202-207)は上に述べた私の考えと同じで、さらに詳しくあった。

4. 殷ではキビよりも水稻が重要

游修齡教授は、この問題についての中国の研究史を述べたあと、「(甲骨文字では)稲と黍の穂の形が似ているが、両者は有水と無水で区別することができた」と述べ、さらにつぎのように述べている(游修齡 1993b)。「問題は、金文(周代以降銅器に刻まれた文字)中に至り、黍の分散穂頭は、禾と一様に棒錘形に簡単化された。禾と区別するため、帯水の偏旁を禾の旁に加えた。小篆(秦代に標準化された文字)中に至り、また水は禾の下に移った、そして水もまた雨を象形した」。このようにして、もとは水稻を表わした文字が黍とされた。なお、許慎による『説文解字』によって、その誤用が権威づけられ



図2 キビ(黍、左)とアワ(粟、右)の穂(筆者撮影)

た。その拠りどころは、「黍の字に水があるのはキビから酒を造るからだ」という孔子の説明であつたらしい。なお、許慎は河南省偃城県の地方官吏で、後漢の紀元後 100 年ごろ、『説文解字』を著し、当時知られていた 9 千以上の漢字の意味を説明した。

游修齡教授は、次のように結論した。以前、于省吾教授は、甲骨の卜辞中の黍字の出現回数が特別に多いことを統計し、百余りで（前出の貝塚によると 106）、その他の穀物は僅かに数十かあるいは一、二であることを見た。本来、新石器時代遺跡より出土する穀物ではすべてアワが絶対多数を占めた。秦漢時期にもアワは一貫して北方の主食であつた。なぜ卜辞中のキビは、その出現回数がアワよりはるかに多いのか？ 現在は明白である。卜辞の黍の統計は実際上その内にイネを包括し、兩種作物が合して一つの統計になっているからである。「稻」の字は、元のイネの字が無くなってから、イネを指すために使われたのである。

游修齡教授によれば、『甲骨文編』により「黍」（キビ）の類の字数の統計を見ると、45 個の黍字があり、その中に帯水のもの 31 個、不帯水は 11 個であり、別の 3 個は黍の中に加えられないので除外した。彼は「この帯水の“黍”をもって、稻の初文であるとする」と結論している。なお、黍字に関係のある文字の集成資料を引用すると、煩雑になるので、ここでは集成資料を検討した游修齡教授の結論のみを引用する¹⁾。

上の説明により、判別できるキビの文字 42 個の内、イネが 31 個でキビが 11 個であつたことになる。なお、白川静（1972）の本でも、帯水の“黍”の字が多い。実際は殷の時代には、水稻の豊凶が、キビのそれよりも重大事であつたことがわかる。しかし、甲骨文中の水稻をキビと読み間違えたために、後世の学者は殷の農業経済が旱地の天水農耕であると、誤解したのである。

5. 安陽の周辺の稲作

河南省輝県の孟庄遺跡から、先商時代（殷以前の時代）の陶器と一緒に稲殻が出たことはすでに述べたが、游修齡（1993a）によると、先秦（紀元前 221 年の秦の統一より前）時期の北方稲作でも輝県は有力な地域である。殷の時代から西周の時代をはさんで 500 年以上も後の東周時代に、いわゆる“三河”（河東、河内、河南）地区があり、稲作が盛んに行われたという記録がある。河東は今の汾水中下流域にあり、河内は今の河南省黄河以北と河北省南部に相当し（安陽を含む地方）、河南は今の洛陽地区である。水稻はすべて汾水、晋水、洛水、漳水等の沿河に在って、灌漑される地方に分布し、水利の建設によってこれを助けることが必要であつた。なお、有名な山西省の陶寺遺跡は汾水の中下流地域の代表的な龍山文化の城邑である。さらに時代は下るが、「清・淇水流域一帯は、水源豊富で、多くの陂塘（貯水池の堤防）があり、東（後）漢時代の崔瑗は、汲県の県令で、かつて人をして稲田地数百頃を開いた」。また「共城県（今の輝県）の西に百門陂（堤防）があり、人々はその水を引いて灌漑田とし、著名な米を栽培した」（「」内は游修齡（1993a）による後漢書と地方誌からの引用）。ここで一頃（ケイ）は約 6ha。この地帯は地理的に安陽の近くである。淇水は安陽から 50km ほどの南を流れている。このような地理的条件を考えると、殷の甲骨文に、頻繁に稲作の豊凶を占った記録があることは理解される。

1) 松丸道雄・高島謙一共著『甲骨文字積綜覧』（東京大学出版会、1994: 218）に黍の字形の集成が、参考・出典とともに示されている。その参考の最初に、羅振玉からの引用として「黍為撒穂、與稻不同、故に作𥝱之状以象之」とある。同じ欄の末尾に別の学者、趙錫元による「沔が稻の初文」の引用がある。この二例からも推察されるように、形態が似ているイネおよびキビと甲骨文字の字形を対照しないで、文字学の議論が続いてきたと思われる。

6. 殷後期からの乾燥気候

殷が古代国家として発展したころは、西方ではギリシャ文明に先行したミケーネの崩壊（ブローデル 2008: 220）の時期にあたり、気候学的には温暖多雨の時代が終わる時期であった。一方、人口は増加して、銅器の鋳造も含めて、大量の燃料を必要とし、耕地の開拓が進み、森林が急速に後退したとみられる。雨量が減退してくると、アワやキビの雨水による栽培は不安定になってくる。稲作の適地も縮小したのであろう。すでに辺境の雨量の少ないところでは、塩害も発生していた可能性がある。

灌漑の施設と水田は、建設・補修されれば、効率的な生産の基礎となり、人口の増加を支える。しかし、政治的混乱や、洪水あるいは旱魃によって破壊されると、容易に修復されない。修復されない場合には、その地域の衰退を呼び起こし、天水農耕への回帰をもたらすだろう。それは人口の減少や集落の縮小を招くだろう。

中国の黄河以北では、気候の乾燥化により、水田稲作の縮小の傾向は、時代とともに顕著になった。しかし、黄河流域で古代王朝が栄えたころには、水田稲作の役割は重要であり、「黄河文明はキビやアワの天水農耕に支えられていた」という見方は、必ずしも適当ではない。殷の甲骨文字の再検討もそのことを教えている。

謝 辞

本研究ノートの最終稿の取りまとめにあたり、東海大学の渡部武名誉教授には、数か所以上にわたる原稿の誤字を指摘していただき、さらに、注1)に触れたものの他にもいくつかの関係資料や文献を送付頂いた。ここに記して、謝意を表す。

引用文献

- 天野元之助（1981）『中国農業史研究』（増補版、第二刷）御茶の水書房。
ブローデル、E.（2008）『地中海の記憶—先史時代と古代』（尾河直哉訳）藤原書店。
貝塚茂樹（1977）「黄河文明」『殷周古代史の再構成 貝塚茂樹著作集第3巻』中央公論社。
白川静（1972）『甲骨文の世界—古代殷王朝の構造—』（東洋文庫204）平凡社。
游修齡（1993a）「歴史上的中国北方稲作」『稲作史論集』中国農業科技出版社。
游修齡（1993b）「稻与黍献疑」『稲作史論集』中国農業科技出版社。
蘇媛（2007a）『華夏城邦—追踪夏商文化探索者足跡』清華大学出版社。
蘇媛（2007b）『黄帝時代—探索中華文明起源之謎』清華大学出版社。